

# 看護大からこんにちば

## 食べること、

## 生きること

「あたりまえ」や「日常」といわれていることが、とても大切なことであると気づくことがあります。その一つに「食べること」があります。

以前、病院勤務をしていた際に出会った患者の話です。

その方は末期の胃がんと診断され、全身ががんの転移もありました。一口食べると、すぐに吐いてしまうことを繰り返しており、食事からは栄養を摂ることは難しく、24時間点滴が行なわれていました。

多少の水分摂取は何とか大丈夫でしたが、食べると吐いてしまうため、当然、食べることは本人にとっては苦痛と思われ、食事に関しては「禁食」との指示を主治医は出すつもりでした。しかし、その患者の強い希望で最後の最後まで食事は提供されました。

ある夜勤の時、その患者の下

膳を担当しました。そのお膳はごはんやおかずが噛み砕いた形で残っていました。

どんな思いで食事をとられているのか不思議に思い、患者に尋ねてみました。すると、「食べれないにおかしいでしょ、食事を出してくださいなんて。よっぽど食いしん坊だと思われるんじゃないかなあ。」

でもね、食事って大切なのよ。飲み込めなくても噛むことで、まだ自分が生きていけると感じる事ができるのよ。食べていることが自分の生きていく証のように思えて、まだ噛める、まだ息をしているんだなと思うのよ。

当然、飲み込めないから噛んで食べ物エキスをもらっている感じしかないんだけど、でもそれが嬉しいというか、力になっている気がするのよね」と静かに言葉が返ってきました。

その患者は日々、萎えていく体を知りながら、食事の一口二口で生きていくことを実感し、ご自身の生きる力としていたのだと感じました。

食事が口から身体全体につな

がり、また食材が身体を通して自身と一緒に生き続けていくものと気づかされ、話は「頭」で聞いているけれど食は「身体」が聴いているものだとも思いました。

一口でも二口でも口から食べ物や飲み物を取ることが大切であり、例え、食べることができなくても、その一口でも飲めることがその人の心の支えになります。病気で萎えていく気持ちを支える一口があり、命にしみこむ一口があります。

食事は私たちが生きるうえで一番、根っこにあるものであるともいえます。

日々、食べられる喜びを今二度、自身の中で噛みしめ、また、目の前の大切な一食を丁寧にしていただきたいと思います。

新潟県立看護大学

地域生活看護学領域

老年看護学

准教授 城戸 裕子